阿佐ヶ谷教会　　Vol.62-No.02

信 友 会 会 報

２０１０年５月

<<4月例会より>>

２０１０年度の信友会は折原威男会長を中心に新しい体制でスタートし、教会における信友会のあり方を考えることになりました。「信仰とは」、「教会とは」などについて、聖書を中心に教理問答書や信仰問答書などから問い直します。４月例会ではその第１回として、大村栄牧師から、コリントの信徒への手紙一１４章に基づいて、コリント教会へのパウロによる教会形成についての指導を通して、私たちの信仰や教会のあり方を考えることにしました。

信友会　４月例会

「教会における信徒のあるべき姿～パウロ書簡から学ぶ～」　　大村　栄牧師

今年度の信友会では、過去から学び、現在を見つめ、今後の信友会のあり方を問うこと、信徒として教会における生活を初心に帰って考える年にするとのことです。今回は、掲題のようにパウロ書簡から信徒のあるべき姿を模索するというテーマを与えられました。

この１月に高月章而兄が逝去され、４月１７日に納骨式を行いました。高月兄は、京都大学の哲学科を卒業されて、NHK に入社されジャーナリストの道を歩まれましたが、一方、学生 YMCA の活動を活発に行い、OB になってもその活動が続けられました。学生運動の問題や京大の地塩寮の法人化等の問題の解決に尽力したり、全国の広い人脈を生かして学Ｙ活動をサポートしておりました。

教会では、信友会会長、財務委員長などを引き受けるなど充実した教会生活を送る一方、故人愛唱歌に２４３番の「ああ主のひとみ」を選ばれ、自分は「うたがいまどうトマス」であると言うように、批判精神も旺盛でした。その生涯は、キリストに捕らえられた信徒の生涯でした。信徒の生活はそれぞれで一律ではありませんが、高月兄のように救い主に捕らえられて生きることを良しとする信仰生活を歩みたいものです。

先ず、パウロが異邦人伝道を行った初代教会を考えるうえに、中心的なコリントの教会を取り上げたいと思います。コリントは、ギリシャ社会にあって交易の中心地で高い文化を誇る都市である一方、繁栄のなかで人心は堕落し風紀も乱れていました。しかし、パウロは敢えてこの町に教会を建てました。

コリントの信徒への手紙一の１４章は、異言と預言というテーマです。４節に、「異言を語る者は自分を造り

上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます。」と書いています。異言とは、宗教行為として熱狂的に、取り付かれたように理解し難いことを語ることで、聞く人も興奮した状況をつくります。２節では、異言は神に向かって語られ、人間には理解できないものですが、霊によって神秘を語っていると書いています。パウロはこの異言も宗教的な行いと考え、異言を語れる人は霊的な賜物をもっていると考えていたようです。

異言を霊的な行為として取り入れるのは、キリスト教ばかりでなくいろいろな宗教にあり、日本では恐山などの「いたこ」が死者の霊を呼び出して思いを語らせる行為が異言の典型です。異言は霊によって神秘を語るもので、時には大きな力を持ちますが、皆が集団的自己陶酔の中にいるのみでは真の礼拝の姿にはならないのです。１８節では、パウロは誰よりも異言を語れることを神に感謝しています。しかし教会では、人を教えるために異言を１万の言葉で語るよりも理性によって５つの言葉を語るとも言います。異言は理性と対極にあり、パウロは６節以下で繰り返して教会の中では異言を語って陶酔状態になっているだけでは皆の理解が得られないと語っています。２３節でも、皆が異言を語り熱狂的で自己陶酔の雰囲気のなかでは、新しく教会に来で間もない人や信者でない人たちには、良くいえば神秘的であるが、単なる集団興奮状態で気が変だとしか思われないと言っています。明確な言葉で語られなければ、本当の礼拝の姿ではありません

では、「預言」とはなんでしょうか。言うまでもなくノストラダムスの「予言」とは異なり、神の言葉を預かって語ることです。預かる方法は、旧約時代の預言者のように直接神の言葉を受けることは出来ないから、聖書を通して神の意志を知り、それを現代の世界に向けて正しい言葉で語る。これは将に礼拝の説教に課せられた課題であると言えます。説教の使命は聖書の言葉を正確に、皆に伝わる言葉で語り、聞く者もまた、神の言葉を聞きそれを生きて行くことです。

１４章３～４節に「預言する者は、人に向かって語っているので、人を造り上げ、励まし、慰めます。
異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます」とあります。

第一に、預言すなわち説教は、「人を造り上げる」と言います。口語訳聖書では「人の徳を立てる」。
それは、人々の心を開き、キリストの道を歩むように力を与えることです。４節では、「異言を語る者は自分を造り上げ、預言する者は教会を造り上げる」と言います。正しく神の言葉が語られ、聴かれる所に、キリストの教会が出現するのです。

第二に預言は人を「励ますもの」。キリストの福音は私たちに罪の自覚を促すと共に、この罪人の私に神の恩寵が豊かに注がれていることを教え、励ましを与えるものです。

第三に「慰める」。礼拝に集う者たちは、いや現代に生きる多くの人々が人生と生活に疲れ、あるいは痛みを抱えています。そのような人々に向かって慰めが語られなければならない。そのような預言、すなわち説教が語られるところが真の礼拝です。

２４節には、「反対に、皆が預言をしているところへ、信者でない人か、教会に来て間もない人が入ってきたら、彼は皆から非を悟らされ、皆から罪を指摘され、心の内に隠していたことが明るみに出され、結局ひれ伏して神を礼拝し、まことに、神はあなたがたの内におられますと皆の前で言い表すことでしょう」と言っています。

礼拝に出ている皆が一斉に新来者の方を振り向いて、その人の罪を責めたり裁いたりすると言うのではありません。その人が神の言葉に触れて、自ずと罪を自覚せずにおれなくなるのです。

使徒言行録５章では、聖霊降臨後に信徒達が使徒を中心に群を造り、財産を売って使徒たちに差し出す原始共産制のような共同体を形成していました。その中に、アナニアとサフィラという夫婦がおり、２人は話し合って財産の処分後に半分しか差し出しませんでした。ペトロはそれを見て、アナニアになぜごまかしたのか、あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだと告げたところ、彼は卒倒し，息絶えました。後から来たサフィアも同様に息を引き取りました。人々はこれを見て非常に恐れたと言う記事があります。人々は死を恐れ

たのではなく、神が心の内を見透かしておられることを知って恐れたのです。

それは他人に隠していたことだけでなく、時には自分自身にさえ隠そうとしている心が明らかにされ、「主よ、憐れみたまえ」と言わずにおれない者になるのです。神の言葉が語られ、聴かれるという真の礼拝の中に身を置くとき、人は神を恐れる思いに満たされ、恐れかしこみ、ひざまずかずにおれなくなります。このように、「まことに、神がここにおられます」という神の臨在を確信し、神を拝むこと、それが真の礼拝の第一にして最大の条件であります。

口語訳聖書では、「ひれ伏して拝み」と書かれています。主を「礼拝する」に比べて「拝む」と言うのは非理性的に思われます。日本では、神棚でも、仏壇でも、神社でも拝むと言うことが行われます。私は幼少の時から礼拝する、祈ると言っていたが、拝むと言う言葉は、他の宗教の言葉だと思っていました。３３節では、神は無秩序の神ではなく、平和の神であると言っています。礼拝は、秩序立っていることが必要ですが、合理的な会議のようでは充分ではなく、神を崇めること、拝むことが大切な要素であります。

私たちの生活の中で「拝む」と言う感覚はどれだけあるでしょうか。イスラム教の信徒が日に３回メッカに向かって拝むようです。また、カトリックでは、先ず聖水で身を清め、祭壇に頭を垂れてから会堂に入り、また、女性は白い被り物をするなど儀式を大切にしています。ギリシャ正教でも、２～３時間きちっと立ったまま礼拝を守っています。ここには神を拝むことを大切にしている感じがあります。

私たちの信仰生活はどうでしょうか。週に１度教会に出席して祈るだけで良いでしょうか。忙しさにかまけて日々の祈りがおろそかにしていないでしょうか。礼拝においては、まことに神がここにおられることを告白して、ひれ伏して神を拝むと言う志をもって信仰生活を送って行きたいと思います。

初代教会の信徒の姿を学びつつ、私たちの信仰生活、教会のあり方、教会の生命である神の言葉を聞いて生きること、単なる自己満足や興奮ではなく、まことに神がここにいますことを確信して教会生活を送って行きたいと思います。今年度の信友会は、会のあり方を考え、教会のあるべき姿をさぐるというテーマで進められます。確信をもって教会を整えること目指していただきたいと思います。

（質疑応答の中で次のような話題があった。そのいくつかを紹介する）

・　１６世紀のマルチン・ルターによる宗教改革以前の信仰生活についは、ローマ・カトリックの信仰が確立されて、礼拝は聖職者が支配することになった。礼拝は、司祭が信徒に背を向けて神と対峙して行われ、信徒はその一部をお裾分けされるような形であった。キリスト教が世界に広まっても、信徒が理解できないラテン語による聖書、祈祷文、讃美歌が提供された。プロテスタントの運動は、初代教会が持っていた本来の姿に、「会衆の礼拝」として取り戻したものである。

・　キリスト教の「祈り」と日本の他の宗教の「拝むこと」とは違うものだと思う。私たちの神は絶対ではあるが人格的な神であるので、自分の思いを告げることができるし、他の人のために執り成しの祈りができる。

そして神さまの御心がなりますようにと祈ることができる。神さまが最善をなして下さるという確信があるからである。他の宗教では、神さまの顔が見えないので、一方的にお願いするしかない。商売繁盛、家内安全など自分の欲求を満たすための祈りなのではないか。

・　日々の祈りについては、課題をもって祈るのが良い。出来れば、聖書を系統的に読んで祈ること、日本キリスト教団の聖書日課やローズンゲンなどを読みながら祈る習慣を持つのが良いと思う。

・　人間は、知・情・意を持った生き物である。信仰においても、哲学的な合理性を追求するだけでも、熱情だけの信仰でも駄目で、両方の側面が必要であると思う。十戒の時代の「妬む神」のように神の熱情を受けとめ、熱い思いを持って信仰生活を歩みたいものである。　　（文責：玉澤武之）